

# 観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十九年七月一日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説 (石川工業高等専門学校准教授 佐々木 香織)

## 狂言 太刀奪(たちばい)

北野のお手水の夜、侍道具を満足に揃え持たない、あまり裕福ではなさそうな主従が参詣に出掛けます。太郎冠者は通りかかった使いの者が見事な太刀を持つのを見て、主人の止めるのも聞かず主人の小さき刀を武器に使いの者の太刀を奪おうとしますが、逆に脅されて小さき刀まで奪われてしまいます。冠者の主人思いがかえって主人の怒りを買ひ、使いの帰りを待ち伏せてせっかく捕らえながら、泥縄式の(成上り)同様に取り逃がします。

## 能 葛城(かづらぎ)

羽黒山の山伏たち(ワキ・ワキツレ)が雪の葛城山に入り通い馴れた山路を踏み迷うところへ、柴取りの女(前シテ)が現れ谷間の庵に案内します。女は柴の束を解き火に焚いて山伏たちをもてなします。しもと結う葛城山の古歌を引く風雅な女には無常の世を生きる嘆きがあるらしく、勤行を始めようとする山伏加持祈祷して悩みを除いてほしいと頼みます。三熱五衰と言えは神の苦しみです。いにしえ岩橋を架けなかつた咎めに葛葛で縛られた葛城の神が救いを求めて現れたのだと分かりました(中入)。山伏たちが勤行していると、美しい女体の神(後シテ)が出現して自身の姿を恥じます。女神の羞恥心こそが架橋の工事を遅滞させ役の行者の呪法で縛られた原因でした。葛城の高天の原は皓々と月が照らし一面の銀世界に映える中で、女神は天の岩戸の昔を思いながら神楽歌を奏し大和舞を舞って、さらに明るい朝が来ないうちにと、夜の岩戸へ入ります。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附(前シテ 里女) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、曲見又は深井の面をかける。

(後シテ 葛城の神) 黒垂をつけ、葛葛をつけた天冠をいただき、泣増又は小面の面をかける。

終了予定 午後八時十五分頃